JAC FUKUOKA
●No.37●
2024年（令和6年）3月15日

●公益社団法人　日本山岳会　福岡支部

福岡支部報

現役支部長浦一美氏はじめ昨年ご逝去された方々を悼み、『偉大なる諸先輩方の追悼特集号』

目　次

1. 浦 一美支部長追悼文
◎浦さん …… 1
◎浦ちゃんとの思い出 …… 2
◎浦一美福岡支部長を偲んで …… 3
2. 中馬 董人元支部長追悼文
◎中馬董人さんを偲んで …… 4
3. 石原 國利さん追悼文
◎石原國利氏の相貌 …… 5
◎「魚津恭太」幻想―石原國利さんを偲んで …… 7
4. 山行記録
◎立山·雨飾山山行報告 …… 8
◎脊振の藪山藪漕の記憶 …… 10
◎上高地 …… 11
5. 令和5年度支部活動報告· 令和6年度支部活動計画 …… 16
6. 編集後記 …… 16

1．浦 一美支部長追悼文

浦さん

No. 10309
中山　健

浦　一美さん

50年ほど前になるでしょうか、旧小倉駅前通りの登山用具店で黙々とスキー板に金具を取り付けていた人がいました。浦さんでした。ご自分の店を持つ準備をしていた時期だったのでしょう。

冬の鹿島槍山頂付近での浦さんと私の山仲間たちとのご縁については聞いておりましたが、お目にかかったのはその時が初めてだったと思います。

その後、浦さんはラリーグラスを立ち上げられました。ときどき店を訪れお会いする時、気取りなくおだやかに対応して下さいました。人柄からにじみ出たものを感じました。

私がリタイヤしたのち、内外の登山、トレッキングやイベントへのお誘いがあり何度かご一緒しました。その思い出話をしましょう。

チベット西部のナムナニの登山隊にご一緒しました。カトマンズからチベット高原へ上がって間もないラチェの町で浦さんと私ふたりが激しい高山病を発症しました。パルスオキシメーターの示す値がともに80に近いという厳しい状態でした。二人は西をめざす本隊と分かれて、北東200kmのシガチェへ向かいました。シガチェで市街の散策、タシルンポ寺裏山のハイキングなど高度順応に努めた3日後、心身とも回復した二人は本隊に復帰することができました。浦さんと苦楽をともにした数日間でした。

スイスーグリンデルワルトの丘の中腹で浦さんと二人数時間過ごしたことがありました。眼下の谷をへだて左手にヴェッタホルンの岩壁、右手に黒々としたアイガーの北壁が眺められる快適な草原でした。近くから次々と離陸したパラグライダーが旋回しながら高度を上げ、アイガー北壁方向に飛び去っていました。浦さんはその様子を注意深く観察していたようです。くさの中に座り込みただじっとしていた一刻でしたが、なぜか印象深く私の心のなかに残っています。

「分水嶺踏破」の際の浦さんの姿も忘れられません。深いやぶをこぎどんどん登る浦さん、急斜面をさっさと下りる浦さん、この前のことのように目に浮かびます。

残念です。浦さん、大変残念です。もうお会いすることも、お話しすることも、できません。

ありがとうございました。浦さん。

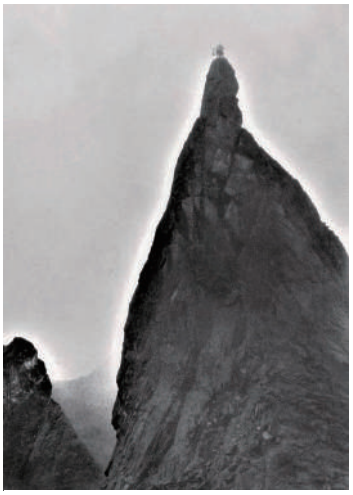
浦ちゃんとの想い出

No. 6486
太田　五雄

浦ちゃんとの想い出を辿る前に、我会福岡・GCC（グレイシャー・クライマース・クラブ）から語らねばならない。

1950 ～ 60 年代国内ではヒマラヤ遠征が活発化し、福岡でもいち早くヒマラヤを目指す大学山岳会や職場山岳会、一般山岳会がヒマラヤの高峰を目指していた。

我々が所属していた九州山岳のパイオニアである筑紫山岳会の流れをくむしんつくし山岳会もそのパイオニア精神を受け継ぐものとして海外登山研究会を発足させ、その一環として 1968 年ヒマラヤ調査隊を派遣すべく計画を進めていたが、急遽ネパールの登山禁止令が出され、やむなく探検的要素を残す北ボルネオのキナバル山に登山隊（八尋廣治隊長）を派遣した。キナバル登山は日本隊として５隊目で、最高峰ローズピーク（4101 m）、ノウダイ・P（4015 m）、オヤユビ・P などに登頂、当時未踏の無名峰であった 4010 m峰に初登頂、ヘッドコーターのカーソン氏の勧めで九州（筑紫）からの登山隊、筑紫山岳会の伝統を海外に残すべくツクシ・P と命名した。


ツクシ・P の登頂

その後 1970 年台湾玉山、雪山の二峰に登山隊（船津武士隊長）を派遣し一応の成果を収めた。

1971 年には私と浦氏の兄である重藤秀世氏とロールワリン・ヒマールからテシラプチャ・ラ（5700 m）を越え、エベレストを盟主とするクーンブ・ヒマールのカラパタール（5545 m）、ゴキョウ（5300 m）と 40 日間の踏査を行った。しかし、残念ながらしんつくし山岳会の主旨はあくまで九州の山を主とする山岳会で、海外の山はそぐわないとして海外登山研究会は 1971 年氷河のある山を目指す会として浦氏はじめ現在も活躍している倉智清司氏等５人のメンバーで福岡・GCC を発足させた。しかし少人数での海外登山は当時のポーラーシステムの登山では難しく、他山岳会に所属しながらも我会の主旨に賛同し、海外の山に興味を持つ個人会員を同人として受け入れた。

一方国内の登山では当時地図の空白部であった屋久島の山岳研究に傾注し、渓谷遡行調査を中心として活動していた。屋久島には未踏の岩壁が数多く残され、我会は屋久島三大岩壁の一つ七五岳北壁に二本のルートを開いた。一つは 1972 年北壁の中央部ダイレクトルート、一つは 1975 年の七五岳東稜（295 m）で、いずれも浦氏を中心とした登攀であった。中でも同人宮崎豊文氏（＊）との東稜の登攀（岳人 338 号）は僅か二本のビレーピンで、全てフリーによる画期的登攀を成し遂げた。このルートは当支部の米澤弘夫氏が第二登を果たしている。

ランタン氷河 C3（5300 m）後列左浦ちゃん
背後左はドラグマルポ・リ、右チュスムド・リ

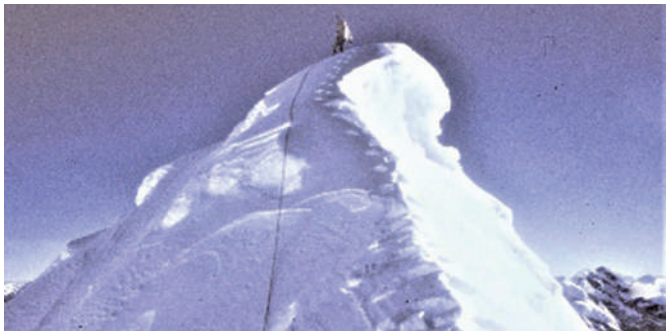
一方、浦氏との海外登山で最も記憶に残る思い出は 1973 年福岡・GCC ランタンヒマール踏査（太田五雄隊長）と 1998 年日本山岳会福岡支部発足 40 周年記念チベット・ナムナニ峰（7694 m・太田五雄隊長）の登山である。

福岡・GCC 発足以来、当会の主旨である「氷河のある山」「探検的要素を備えた山」を目指す山としていずれも最も適した山であった。

当時ランタン・ヒマールは首都カトマンズに最も近い山群でありながら、一部空白部として地理的解明の要素を多分に秘めた山域として我会の主旨に即した願ってもない地域であった。

ランタンヒマールでの活動は二か月にも及んだが、その間浦氏ら４人によるドラグマルポ・リ（6204 m）の登頂や、太田、倉智氏等チュスムド・リ（6508 m）の試登、ティルマンのコルから見た広大なチベット高原観察等、これらの活動は周辺山域の地理的解明に多大な成果を得た。

ドラグマルポ・リの南斜面を登る浦ちゃん



ドラグマルポ・リ初登頂

一方浦氏の発案で日本山岳会福岡支部のナムナニ峰の登山隊が編成され、わずか４人の登山隊で第三登を果たし、さらには世界の聖山カンリンポチェ（カイラス峰）の巡礼、チベット高原中央部の踏査など多大な成果を得ることができた。浦ちゃんは難病を抱えての参加で、計画推進の立役者でありながら裏方に徹し、当計画の企画、マネージメントなど献身的な活動によって隊の成功に結び付けた功績は大きい。

ナムナニ峰 ABC（5600 m）
左から２番目浦ちゃん

尚、当登山隊の報告書は「ナムナニ峰登頂」（3000 キロ辺境の旅･1998 年発行）、日本山岳会会報山岳（第 93 年号）、岳人 615 号に詳しい。

その後日本山岳会福岡支部長に抜擢され、日本山岳会本部創立 120 周年記念事業の「日本の古道を歩く」の一環、福岡の古道修験道の道「宝満山から英彦山」を歩き、その研究成果を発表（日本山岳会福岡支部報 No35）、浦ちゃん最後の輝かしい遺稿となった。

最近交流が深かった前支部長高木荘輔氏、辻和毅氏、石原國利氏、中馬董人氏等諸先輩方の逝去に続き、またしても現役の支部長、福岡・GCC 会長浦一美氏を失ったことは私にとって非情な悲しみであり、共に登った数々の山行が「わが山の人生」に深く刻まれている。衷心よりご冥福を祈るばかりである。これまでの友好ありがとう。

（注）

＊宮崎豊文氏の記録

マッターホルン北壁、ドリュ西壁、ルベンゾリダイヤモンドルート、ニルギリ北峰（7061 m・GCC 同人・白石宣夫隊長）登頂、シシャパンマ（8046 m・GCC 同人・成末洋介氏隊長）登頂等。

浦一美 福岡支部長を偲んで

No. 9826
渡部　秀樹

昨年７月、浦一美さんとはヨーロッパ・アルプスでハイキングを楽しんでいた。コロナ禍での制限が明け、以前から浦さんの登山教室受講者の方々との約束で企画されたもので私も同行した。現地ではシャモニ在住の国際山岳ガイド白野民樹氏も合流し、それぞれがかつて登った山々を眺めながら登山史にも触れ歩くと生徒さん達も聞き入っていた。マッターホルンを背景にビールを飲み饒舌になった浦さんの笑顔が忘れられない。帰国後も福岡支部の山岳古道山行の準備で頻繁

アイガー、シュレックホルンをバックに
（右端が浦さん 2023 年 7 月）

にお会いしていたが体調が思わしくないとのことで治療に専念するため企画の延期を決めた。10 月中旬に検査入院されたが僅か２週間で帰らぬ人となってしまった。直前までお元気であったので信じ難いことであった。

浦さんは、1971 年しんつくし山岳会の海外登山研究会から分離独立した福岡ＧＣＣ（グレイシャー・クライマーズ・クラブ）の結成メンバーで、代表の太田五雄氏、倉智清司氏らともに屋久島の未踏ルートの開拓から始まり、ネパール、パキスタン、チベットの山々に挑戦していった。1973 年にランタンヒマールへ入り、これがきっかけでサラリーマン生活を終え、1976 年福岡に「山とスキーの店・ラリーグラス」を創業された。

「ラリーグラス」では初心者から海外遠征隊まで地域の登山者のサポート、登山文化の普及に尽力されてきた。私も大学時代から店にはお世話になりいろいろなアドバイスを受けていた。長年カルチャースクール等で登山教室を担当されたこともあり卒業生の山の会の監修などもされていた。

福岡県山岳連盟福岡支部を改め、1991 年に福岡市山岳協会が設立された。浦さんは、過去の古い体質を改め若い会員たちの夢と希望をかなえさせたいという思いからの設立だったと語っていた。福岡は登山が盛んで昭和初期からその活躍ぶりは世に知られていた。先輩方の流れを受け若い会員たちも育っていたが、単一の山岳会では難しい大きな海外遠征登山の流れを作り出そうとされた。設立から３年間の準備を経て 1996 年福岡市山岳協会・チョモランマ峰登山隊が組織され、池邊勝利隊長以下 15 名の隊員で見事に登頂に成功した。

社会人山岳団体会員の減少が始まると登山事故も増え、衰退した山岳団体では登山者育成に対応がしきれなくなると考え、九州でもガイド業の必要性が生じた。浦さんは公益社団法人日本山岳ガイド協会所属の全九州アルパインガイドクラブを結成し、長年代表を務められた。

日本山岳会では創立 100 周年記念事業の中央分水嶺踏査、創立 120 周年事業の全国山岳古道踏査の福岡支部担当山行を実施リーダーとして担当され、2021 年から福岡支部長に就任されていた。

まさに九州の登山界を牽引してきた人生であった。これから支部長として福岡支部の活性化に尽力いただけると皆が期待していただけに哀惜の念に堪えない。

（注）

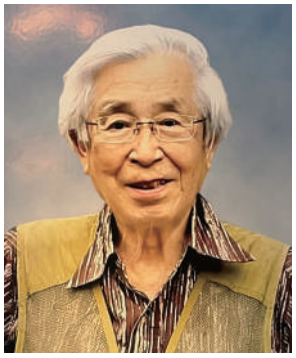
浦 一美（うら・かずみ）

昭和 22 年　福岡県生まれ
1971 年　福岡ＧＣＣ設立
1973 年　ランタンヒマール遠征
1976 年　「山とスキーの店・ラリーグラス」を創業
1991 年　福岡市山岳協会が設立される
1998 年　JAC 福岡支部ナムナニ遠征
　　福岡市山岳協会会長
　　全九州アルパインガイドクラブ会長などを歴任
2021 年から日本山岳会福岡支部長
2023 年 11 月 3 日逝去、享年 76 歳

2. 中馬 董人元支部長追悼文

中馬董人さんを偲んで

No. 11639
米澤　弘夫


中馬　董人さん

2023 年 9 月 2 日、中馬 董人さんが逝去された。享年 87 歳であった。中馬さんは九州大学山岳会の重鎮であり、また日本山岳会会員として長きに渡り活躍してこられた。私は日本山岳会および九大山岳会の会員ではあるが、日本山岳会会員としては、年に一度の飲み会に参加する程度であり、実質的に幽霊会員に等しかったので、中馬さんに関する記載が、九大山岳会関連に偏る事は、ご了承願いたい。

中馬さんは 1954 年、九州大学入学と同時に九大山岳部に入部された。私が 1964 年入部であり丁度 10 年先輩に当たる。山岳部において、夏冬を問わず、剱岳、穂高岳、鹿島槍ヶ岳と登り込まれ、腕を磨かれた。卒業後、電電九州に入社され、同社の山岳部で一線に立って活躍された。その実績により、1963 年、九州で初めてのヒマラヤ遠征隊であるヒムルンヒマール（現在名：ネムジュン）遠征に隊員として選抜された。残念ながら登頂には成功しなかったものの、その後の九州登山界に大きな影響を及ぼしたのは誰しもが知るところである。

私が入部後、ヒムルンヒマール遠征の報告会が開催された。新入部員達にとって、ヒマラヤ遠征に参加した登山者など、雲の上の人だった。当時、持参されたピッケルを手に取り、これがヒマラヤ帰りのピッケルかとつくづく眺めたのが思い出される。

その後、中馬さんは日本山岳会に入会された。会員番号が 6222 だから 1967 年 1 月の入会であり、2016 年には永年会員となられた。また 2012 年から 2016 年まで日本山岳会福岡支部長を務められた。日本山岳会においても、大先輩である。末席ながら懇親会等に声をかけていただき、浦さん、倉智さん、太田五雄さんなどを交え、大いにメートルを上げたものだった。そのうちのお二人が今年になって鬼籍に入られた。日常の儚さを痛感するばかりである。

年が離れていたために、直接本格的な山行を共にしたことは無かったと思う。しかし、九大山岳部、山岳会の行事などには欠かさず参加されて、穏やかな話ぶりながら、問題点を的確に指摘され、威厳のあるご意見番として後輩の指導にあたられていた。私ども後輩にとっては憧れであり、また大きな目標であった。

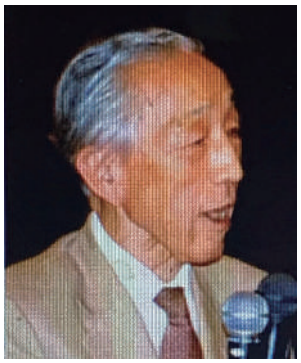
歳を取ってからも、海外登山への情熱は衰えず、2001 年には 60 歳を超えた高齢だったにもかかわらず、再度ヒムルンヒマールへ挑まれた。電電九州山岳部としてもこれが 4 回目の挑戦であり、登頂できなかったのは、痛恨の極みである。2005 年にはカラコルム・バルトロ氷河トレッキング、2007 年にはアフリカ・キリマンジャロ登山と飛び回っておられた。登山ではないが、南米パタゴニア、中国奥地、トルコ等、世界各地を巡っておられる。狭い日本に満足する様な器ではなかった。

2021 年 5 月に九重沓掛山へ登ったのがご一緒した最後の山行となった。その後も、飲み会などで同席する機会があり、2022 年の忘年会に最長老のお一人として参加され、終始笑顔で歓談されていたお姿が忘れられない。九大山岳会では、山岳部創立期を担われた先輩方の訃報が相次いでいる。山岳部創立の経緯など、もっと教えて欲しかった。偉大な先輩を失った事が残念でならない。

3. 石原 國利さん追悼文

石原國利氏の相貌（そうぼう）

No. 6748
重藤　秀世


石原　國利さん

昨年２月末、石原國利氏が急逝された。コロナ発症したが入院できず、自宅療養となった。その間に急変して対応できなかった。ご高齢ではあったが、もっとお話をお聞きしたかった。感染症対策が医療機関の悲鳴に応えない施策が悔しい。享年 93 歳。謹んで哀悼の意を表したい。

石原氏は岩稜会（鈴鹿）に所属、1955 年１月の前穂高岳東壁登攀中にナイロンザイル切断事故に遭遇。それが事件となり、当事者として批判の矢面に立ち、石岡繁雄代表らと共に、打開に苦闘することとなる。

ナイロンザイルの岩角に弱いという特質を科学的に解明し、社会に訴え続けた取組みは広く支持されることになった。「ナイロンザイル事件」は 1975 年「登山用ロープの安全基準」策定を生み、登山の事故防止に貢献するとともに、「製造物責任法」（PL 法）の先駆けとなり、国民の命と生活を守る業績と評価された。

1.山岳人・石原國利氏

『穂高の岩場』 石原氏等は「ナイロンザイル事件」の活動の傍ら、写真による岩場のルート図集制作に向けて、穂高岳全域の登攀を続け、『穂高の岩場１．２』（岩稜会編 1959、60 年）が朋文堂から刊行された。（写真⑦）

⑦穂高の岩場１、２（岩陵会）朋文堂刊

海外登山のリーディング

・1960 年、東海岳連ジュガールヒマール主峰（ビッグホワイトピーク）登山隊に推挙されて参加。地理的解明から取組む登山だったが、マディアピークに登り主峰を初めて目にする、最高到達点を印した。（写真⑧参照）

・1965 ～ 66 年　日本山岳会東海支部　アンデス学術遠征隊に参加、アコンカグア（6,959m）南壁の登攀に成功（フランスルート・第二登）。その後、単独で南米フェゴ島を踏査、オリビア山（1470m）登頂。

石原國利氏の活動（山の図書館ニュース No.）

① 2006.11「山と渓谷」石岡繁雄氏の追悼 (No.26)
② 2007.5.19 ナイロンザイル事件討論会 (No.21)
③ 2007.8 日本山岳会東海支部報 No.11(No.26)
④ 2011.12 対談：近藤信行「井上靖「氷壁」とその時代」日本山岳会緑爽会 会報 No.104（No.40）
⑤ 2013.11.22 名古屋大学博物館企画展 特別講演会「ナイロンザイル事件発生のいきさつ」(No.46)
⑥ 2018.8 井上靖研究会で対談　対談：田村嘉勝 同会長「井上靖先生―想い出すこと」

また、日本山岳会東海支部の第２代支部長を 1964 年（昭 39）から 1967 年（昭 42）まで務められた。この一連の活動はやがて興隆する東海地区の登山活動の礎を築くことになったと言えるのであろう。

2.「ナイロンザイル事件」の伝道者（石原國利氏の活動）

①、③「石岡さんを偲ぶ」（追悼）

2006 年８月に逝去された石岡繁雄岩稜会々長の追悼文を「山と渓谷」誌（同年 12 月号）に寄稿された。日本山岳会東海支部報に再掲。同支部報には歴代会員の石岡氏追悼があり、石岡氏の業績の評価とともに、石原氏の活動が語られているものが多い。

②「ナイロンザイル事件を語る」討論会

2007 年５月 19 日、「山の図書館」が開催

石原氏は同事故の体験と事件になった事態に、真実を訴える活動を紹介された。取材したメディアは「安全神話を疑え」と報道した。

（以下は石原氏の発言から抜粋）

・私たちは、自分たちのザイルが切れたことは起きてしまったことだが、第二、第三の事故が起きてはいけない。欠陥は欠陥として早く山岳界に周知させなければいけないという立場で動いていました。

・私の受け止め方としましては、これは私たちの事故で最後でありたかった。それで一生懸命発表したわけです。

・山岳人とは自分が体験することだけしか認識しないという面がありますね。だから前の事故が教訓になっていない。教訓とするためには山岳連盟とか日本山岳会とかが、そういうことをはっきり伝播していかないと進歩していかないと思いますね。

④ 2011 年 11 月　対談「井上靖『氷壁』とその時代」

対談者は石原氏と近藤信行氏（文芸評論家）、ナイロンザイル事件と小説「氷壁」の興味深い内容。

⑤特別講演会　ナイロンザイル事件発生のいきさつ

2013 年 11 月 22 日(金)第 28 回 名古屋大学博物館企画展「氷壁」を越えて－ ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯　石原國利（ナイロンザイル事件当時の登山パーティのリーダー）

⑥井上 靖研究会で対談

2018 年８月、井上靖記研究会で同会長：田村嘉勝氏と対談。**主題：井上靖先生－想い出すこと**（井上靖記念館「井上靖研究」No. 17）　※日本山岳会福岡支部報 No. 32 2019

年（平成 31）に転載）

3. 石原國利さんと「山の図書館」

2007 年 5 月、記念講演「ナイロンザイル事件の社会史」（中川和道氏）を準備中に、松本徑夫氏（顧問）から石原國利、上岡謙一氏（救助）をお招きしては、との提案で、同事件の当事者・関係者のお話を聞く歴史的な企画が実現した。石原さんはそれを機に山の図書館に入会いただき、交流が始まった。

石原さんは講演会、討論会の開催を大変喜ばれていた。私たちはこの記録を残そうと、テープ起しをして原稿を作り、石原、上岡、松本、中川氏に校正をお願いした。まだ変換ソフトはなく小刻みに音声を聞き返し入力した。

石原さんからはすぐに校正が届き、幾つかの点で事実確認の指摘があった。それができない内に上岡氏が逝去され、2011 年には松本氏が急逝された。

数年後に中川氏が来福される機会ができ、仮本を作って、そのたびに石原さんを交えて、打ち合せをした。「大きな課題なので、じっくりやりましょう」といつも励まされた。

☆ 2011 年、松本徑夫氏の逝去に伴い、その著書リスト（登山分野）の照会をうけ、石原さんからその作業の依頼があった。

「これを最初に作るのは、山で言えば“初登攀”ですよ」と。この言葉は石原さんの生涯を支えた気概だろうと共感した。石原國利さんは誇り高い“クライマー”だった。

☆ 2017 年、上高地で開催された「氷壁を越えて」展に学び、2018 年から「山の図書館」で「ナイロンザイル事件」の常設展示を企画した。資料、データは名古屋大学資料室、博物館及び「石岡繋雄の志を伝える会」から提供戴いた。

開会に際し「伝える会」、岩稜会の方々を迎えて懇談会を開催し、「山の図書館」の展示は「説得力がある」（石原氏）の評をいただいた。「伝える会」からは活動の現状などが報告され、私たちはこの教訓を登山の振興、特に冬期登攀などの取組みにどうつなげるかが課題と提起すると、石原氏は賛意を示された。

☆ 2017 年、「ナイロンザイル事件」の一括資料（15 部、分割不可）がインターネットにアップされ入手した。これを報告し前所有者・木下是雄（元学習院大学学長）と伝えると大変喜ばれた。故・石岡繋雄氏の最も近い理解者だったと。

☆近年、石原氏はオリビア山の記録を書いておきたいと言われて、資料の『火の国・パタゴニア』（津田正夫著）を探してお届けしたが、叶わなかったようだ。

※資料文献について…記載の資料は、石原氏から生前、「蔵書に加えて」と折々に提供されたものが多い。（山の図書館・蔵）

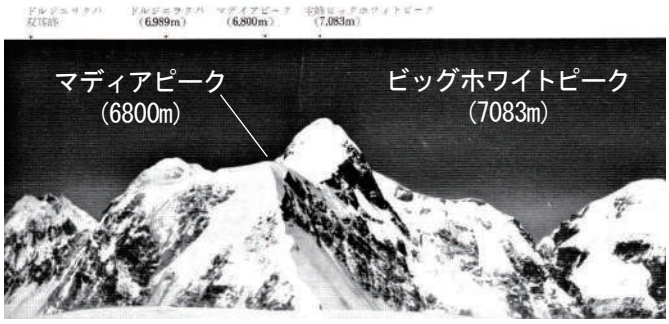
①2006.11「山と渓谷」石岡繋雄氏の追悼(No.26)
③2007.8 日本山岳会東海支部報No.11(No.26)

②2007.5.19 ナイロンザイル事件討論会(No.21)

④2011.12 対談：近藤信行
井上靖「氷壁」とその時代
日本山岳会緑爽会
会報 No.104（No.40）

⑤2013.11.22
名古屋大学博物館企画展
特別講演会：
ナイロンザイル事件発生のいきさつ(No.46)

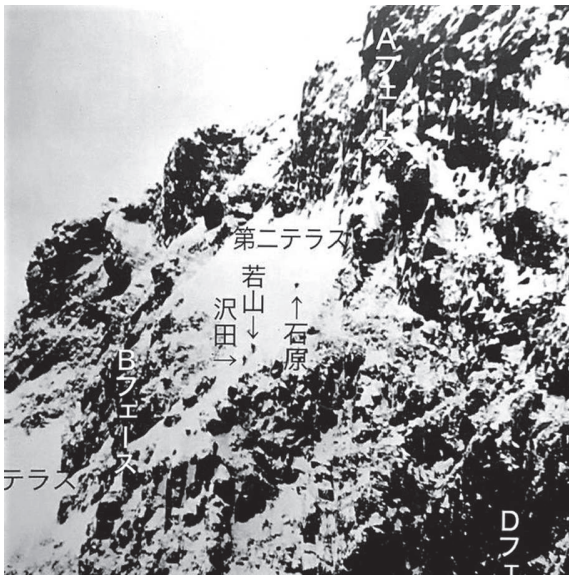
⑥2018.8 井上靖研究会で対談。田村嘉勝 同会長
「井上靖先生—想い出すこと」



⑧ビッグホワイトピークと、マディアピーク（一部加工）

⑨ジュガール・ヒマール登山隊　前列右から2人目

⑧⑨全日本ヒマラヤ登山隊報告書1960年
東海地区山岳連盟ヒマラヤ委員会より



⑩前穂高岳東壁
ナイロンザイル切断の前日の岩稜会パーティ
（山の図書館常設展示パネルより）

「魚津恭太」幻想―石原國利さんを偲んで

No. 16228
尾登　憲治

若いころ、会社の同僚（女性）からこう言われたことがある。「オト君、あなたは魚津恭太のようなヒトね」。これだけで彼女の切ない気持ちは充分わかった。何も応えられなかった覚えがほろ苦く思い出される。

昭和 31 年に始まった朝日新聞の連載小説「氷壁」。連載開始から 20 年近く経っていたが、このような会話が若者の間で可能だったのだ。かおると美那子。魚津恭太はどこか虚無的な心情を心に秘めた男だった。冬の前穂高東壁でザイルが突然切れ、親友小坂は奥又白に消えた。切れたナイロンザイルは事故から事件へと広がりを見せ、魚津は社会的に窮地に立たせられていたのだ。彼の虚無はそれが原因だったのかどうか。

石原國利さんは魚津恭太のモデル・分身である。作家井上靖は登山家石原國利が好きであった。信頼を寄せた。だから「氷壁」が生まれた。では石原國利のどこが好きだったのだろうか。

「井上靖」他と同じように、「井上靖」とする。魚津恭太のような主人公は他の小説の中にも数多く出てくる。どこかで判断停止し、その時の感情と運命に身を任せて、生でも死でもその結果を受け入れる。私はこれを虚無的ロマンティシズムと勝手に名付けている。井上靖の虚無的ロマンティシズムの行き着く先は、決して明るくない。悲哀や心の闇が待っている。無限や永遠に夢や希望を託すようになる時代は、もう少し後になってからである。

井上靖は数多くの詩を書いている。彼の創作の根っ子には詩的感性の凝縮があるのだが、彼は自分のことを詩人だとは思っていなかった。最初の詩集は「北国」。戦後、再び詩を書き出した直後、昭和 25 年、詩人甲斐昇氏から詩集を出さないかと誘われた。詩のような散文のような。彼は「詩を閉じ込めておく箱」だとそれを表現した。「北国」は井上靖の原石である。34 篇のこの原石に、石原國利へと繋がる心情が隠されているに違いない。というより、原石の中に石原國利が散りばめられていると理解した上で、想像を逞しくする・・・。

石原國利さんが逝った今、「北国」の中から私の好みで、「比良のシャクナゲ」という詩を捧げたい。

比良のシャクナゲ

むかし「写真画報」という雑誌で
“比良のシャクナゲ”の写真をみたことがある。
そこははるか眼下に鏡のような湖面の一部が
望まれる比良山系の頂き、あの香り高い白い高山植物の
群落が、その急峻な斜面を美しくおおっていた。
その写真を見た時、私はいつか自分が、
人の世の生活の疲労と悲しみをリュック
いっぱいに詰め、まなかいに立つ比良の稜線を
仰ぎながら、湖畔の小さい軽便鉄道にゆられ、
この美しい山巓の一角に辿りつく日が
あるであろうことを、ひそかに心に期して疑わなかった。
絶望と孤独の日、必ずや自分はこの山に
登るであろうと――。
それからおそらく十年になるだろうが、
私はいまだに比良のシャクナゲを知らない。
忘れていたわけではない。
年々歳々、その高い峰の白い花を瞼に描く機会は
私に多くなっている。ただあの比良の峰の頂、
香り高い群落のもとで、星に顔を
向けて眠る己が睡りを想うと、その時の自分の姿の持つ、
幸とか不幸とかに無縁な、
ひたすらなる悲しみのようなものに触れると、
なぜか、下界のいかなる絶望も、いかなる孤独も、
なお猥雑なくだらぬものに思えてくるのであった。

4. 山行記録

立山・雨飾山山行報告

No. 16732
原　義宣

期間及びメンバー

期間は、2023 年 9 月 19 日（火）～ 25 日（月）、メンバーは会員の淀川雅之、酒匂輝昌、長岡ミツ子、原義宣及び嶌本久仁子（スイス友の会会員）一般参加者の一人計７名である。尚、酒匂さんは所用のために立山山行のみとなった。後期高齢者の集団であり安全第一をモットーに、ゆとりのある山行スケジュールとした。

１日目（９月１９日）　福岡～富山～みくりが丘温泉

博多発６時５９分の新幹線に乗車、新大阪で特急サンバードに乗り継ぎ、更に金沢にて北陸新幹線に乗り換え富山駅へ。昼食を済ませ富山地方鉄道・立山アルペンルートの電車・ケーブルカー・電動バスを乗り継いで室堂駅へ移動。霧雨の中、歩いてみくりが丘温泉に１７時頃到着後、温泉に入り食事を楽しむ。（写真１）

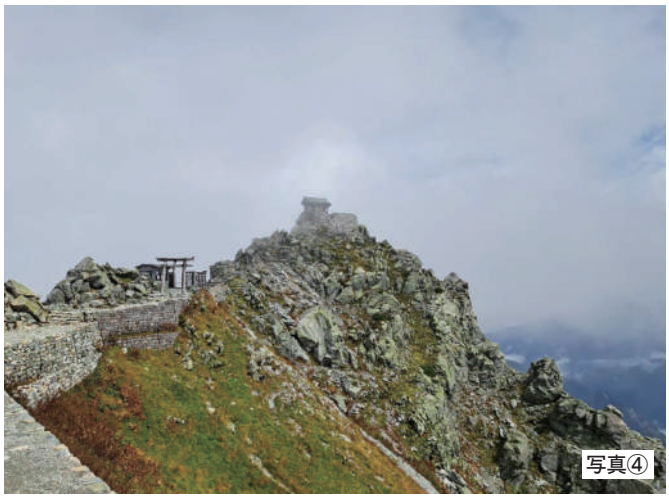
写真①

２日目（９月２０日）　室堂（みくりが丘温泉）～立山（雄山）～みくりが丘温泉

小雨の降る中、７時過ぎに宿を出発し、「全員山頂へ」をモットーにゆっくりとしたペースで一の越小屋へ。７月に来た時は登山道数ヶ所に雪渓が残っていたが、すっかり溶け歩きやすい歩道となっていた。途中、祓堂付近で雷鳥とも出会い幸運を喜びあった。一の越小屋で暫く休憩後に山頂を目指す。この頃には雨も上がり時折太陽も出ていたが、風は強く眺望は効かず黙々と歩を進める。

写真③

雄山神社が見える四の越付近では（写真３）久留米に叔父さんがいるという若者にも出会い、世の中の狭さを実感した。更に雄山神社を目指し登り、（写真４）１０時３０分頃山頂到着し、雄山神社に参拝したが、風が強く、雲の流れも速く、周囲の山々は見ることができず下山を開始（写真２）。


写真④

道は登りと下りが分けて整備されており、急登であることを除けば、歩きやすい登山であった。１３時３０分頃全員無事宿に戻る。

写真②

蛇足になるが、今回の立山山行は２度目であった。一度目は７月中旬。今年１月に海外移民の家族会でボリビアに旅行した際に出会った山女子が、みくりが池温泉で働いているので来ませんか？との誘いで計画した。梅雨の時期であり、悪天候のために一の越で引き返した。今回はそのリベンジとして一部メンバーが入れ替わった状況で計画した。今回は好天気を期待したが、運悪く北陸地方に低気圧前線が張り付き、今回も天候に恵まれなかった。これも自然の営みの世界であり仕方のないことであろうと自分で慰めている。

３日目（９月２１日）　室堂（みくりが丘温泉）～アルペンルート経由 JR 大糸線で南小谷～雨飾山荘

８時前に宿を後にして室堂駅まで歩き、アルペンルートのトロリーバス・ロープウェイ・ケーブルカー・電気バス・

路線バスを乗り継いで信濃大町駅へ移動。更にJR信濃大町駅からＪＲ大糸線で南小谷駅に到着し、遅い昼食を摂るために数少ない地元食堂を探す。メニューにクマ肉料理が記載されていたが、当日は素材なしで食すことができず残念であった。町営バスでは殆ど貸し切り状態のバスに約４０分揺られ、１６時過ぎに町営の宿「雨飾山山荘」に到着。

４日目（９月２２日）　宿（車で移動）～登山口～雨飾山～登山口～徒歩にて宿へ

６時２０分に雨具を着け、弁当を持ち宿の車でキャンプ場駐車場のある登山口に移動。登山届を出し登山開始。登山道は４００m毎に１１区画の標識が設置され山頂までの進捗度が分りやすくなっていた。ほぼ中間点の粗菅沢迄はブナ群生林の中、リンドウ、チングルマ、アザミ等の花を観賞しながら余裕をもって登る。

粗菅沢（写真５）を超えた後半は約４５０mの標高差の急登が続いた。（写真６）

写真⑤

写真⑥

山頂まで８００mの笹平からは平坦な道となり一息つく。最後の緩やかな登坂から山頂を見た時、女性の横顔に見えるので「女神の山」とも言われているらしいが、ガスが掛かっており識別できないうちに山頂に１１時４０分頃到着した。晴天時は能登半島、日本海、後立山連峰等見えるらしいが、ガスのために見ることはできなかった。霧の中で弁当を食べ記念写真を撮り、（写真７）１２時過ぎに

写真⑦

下山開始。下りも同一ルートを落石、滑落に注意しながら慎重に下りる。例年は、１０月に入ると標高１５００m以上では紅葉も見られるらしいが、あまり進んでおらず残念。１６時頃に登山口に帰着し、宿まで約５０分歩き無事登山を終了した。

５日目（９月２３日）　宿～南小谷～松本～名古屋～新大阪～博多

９時前に宿を出て、９時１３分のバスで南小谷駅へ、松本駅までＪＲ大糸線で移動し、特急しなので名古屋駅へ行き、新幹線に乗り換え、新大阪駅経由で博多駅に帰着。

脊振の藪山 藪漕ぎの記憶

No. 14309
松原　稔

『私にとっての藪漕ぎ山行とは・・・』と突然の書き出しですが、私が福岡に居を構え変わらず山登りを生活の中心に据えてほぼ30年、あまり見向きされることもない脊振の藪尾根・藪沢を随分と歩きまわりました。しかしそろそろその限界も見え始め、次はどうしようか・・・と思い始めていることもあり、JAC支部報の紙面を借りてこの機会に整理しておこうと書いたものです。なお個々の尾根や沢毎に述べていますと、紙面幾らあっても足りませんので、脊振山地を私の歩いた範囲で大きく5つに分けて概略述べさせていただきます。

私は北海道生まれ、何より楽しかったのは雪の締まった春4～5月、夏には到底登る事の出来ない尾根をスキーあるいはツボ足で自由自在に歩き廻ることでした。でも福岡へ来てそんな山行が望めるはずもなく、いわば代替・思いつきで始めたのが脊振の藪尾根・藪沢探索です。冒頭の回答は、小さくても私のなかの野生を確認するためと言えば大袈裟でしょうか。

脊振山地と言っても、東は基山、西は十坊山から尾根が海に落ちるまで、更に山地の北側に広がる里山群と範囲は広大ですが、あくまで公共交通機関を使え、最後は脊振主稜線に上がりきる尾根や沢と言うことで、小爪谷あたりから西を対象としています。

1　金山を中心として

金山、その前山の西山を中心とするこの山域は、どの尾根でも沢でもそれなりの長さがあり非常に興味深い。まず西山の北面には小さな沢群、いずれも名もない沢ですが行ってみると意外と大きなナメ滝があったり、行って見る価値のある山域です。新飼川と坊主川の間の広い山地、どこを登っても同じような地形でハッキリとせず、その中を恐らく林業者の作業道なのだろう縦横に踏跡あり、慎重に行動しないと面白いが迷いかねない。金山山頂から上石釜に至る長い新飼川左岸の尾根、ここには朽ちた道標があったり比較的しっかとした踏跡がある。しかし近年下部で完全舗装の林道が出来、林道が尾根を断ち切っているので今はどうなっているかわからない。

2　井原山周辺・雷山

瑞梅寺集落から井原山へ登る登山道から雷山に登る登山道の間の山域は洗谷に見るように、地形が急峻でどの尾根・どの沢を辿っても面白い。ルートによっては石灰岩質の地質なのか底の見えない穴があったりもする。しかし地形が複雑で入るなら覚悟して入る必要あるだろう。唯一、清賀の滝の上部はどの沢に入っても迷う事なくストレートに背振主稜線に出る。

3　雷山より羽金山

この山域に入ると山と里がぐっと近くなる。また地形も穏やかになるが、その代わり里からの長いかつては里人たちに歩かれたであろう古い踏み跡が随所にあり、それらを辿るのも面白い。その中で地蔵はJAC山行でも計画され、登られた方も多いと思うが、地蔵ピークより尾根は更に上に延びていて脊振稜線まで続き、歩きがいがある。昔はこれが羽金山に至る一般ルートだったのかもしれない。獅子舞岳は1/25,000地形図に記載されているので皆知っていると思うが、登った人は少ないのでないか。電波塔専用道路からは5分のピークだが、これも白糸の滝から地図を頼りに登ってみると面白い。

4　羽金山より浮岳

羽金山より西は里山に近いだけでなく、一気に山域が広がりまとまりを欠くが、二丈岳から雷山浮岳林道を横切って脊振稜線に上るのも色々なルートを設定できるし、一貴山川左岸尾根上の三角点（480 m）を探しに行ったとき、一緒に行ったオーストラリア人の友が凄まじい枯竹帯に『オー　ジャパニーズジャングル』と叫んでいたのも今は良い思い出。

5　浮岳より十坊山・県境尾根末端包石

ここは山域が狭いだけに沢はドロ沢、尾根は正真正銘の藪と言う印象強く、一緒に行った仲間に『あそこには二度と行きたくない・・・』と言われた山域。でも私は脊振山脈（？）の縦走は県境をなす尾根が海に没する包石の海水に手を付けて十坊山を目指す・・・これが出来て初めて縦走完結するものと思っている事と、上記4の地域も含めて、この地の歴史と廃道への興味もあり実によく歩いた。

ここまで大雑把に山域毎に概要述べてきたが、この中で唯一歩いていない心残りが、福吉より浮岳に至る太く長い尾根、最後にと残しておいたのですが、何時か私も年齢、少々きつくなってきているのも事実、これを機会にトレースしたいと思ってはいるのですが、さてどうなるか。

尚、これらの記録は全て、1/25,000地形図とコンパスで歩いたもの。今はYAMAP等を使って地図読みの苦労も少なく、容易に歩けるのでは・・・と思っています。

洗谷左岸の
尾根を降りる

一貴山ピークを
目指して

地蔵から羽金山へ
続く長い稜線
（右の2つピークが
地蔵）

上高地

No. 15240
柴田　佳久

上高地は、年間 125 万人（2023 年統計）が訪れる日本有数の観光地である。梓川にかかる河童橋から見上げる奥穂高岳～吊尾根～前穂高岳は実に壮観で、山岳景勝地として有名であるが、登山者にとっては穂高連峰や槍ヶ岳への登山基地である。私が初めて上高地に足を踏み入れたのは幼少の時（記憶にないが）で、山を登るようになってからは季節を問わず訪れている。以前は、観光客に紛れて河童橋の上でお決りの記念撮影をして直ぐに山に向かい、下山時は横尾からの林道歩きに疲れ、河童橋周辺の観光客の喧噪にうんざりしながら、直ぐにバスに飛び乗り、帰路についていた。しかし、50 歳を過ぎてから、上高地周辺をのんびり散策しながら、風景を楽しむことも覚えた。

写真 -1　初めての上高地（昭和 37 年）

◆上高地の歴史

「上高地」の名は、穂高神社の祭神である「穂高見命」が穂高岳に降臨したことに由来する「神降地」、この地（穂高神社奥宮・明神池）に祀られていることに由来する「神垣内」または「神河内」から現代表現に転じたとされている。

上高地に最初に分け入ったのは杣人とされているが、詳細は不明である。江戸時代の文政 11 年（1828 年）に播隆上人が槍ヶ岳に登り、頂上に仏像を安置したとの記録が残っている。明治 18 年には島々の住民が夏の間だけ梓川沿いの平坦地に牛や馬を放牧して「上高地牧場」が始まり、昭和 9 年まで続いていた。

山岳関係では、明治 10 年に日本アルプスの語源となる「Japan alps」という表現を使って登山記録を雑誌に紹介したウィリアム・ガウランドが槍ヶ岳に登頂、明治 25 年に「日本近代登山の父」と言われ、登山紀行「日本アルプス　登山と探検」で日本アルプスを世界に紹介したウォルター・ウェストンが槍ヶ岳に登頂している。当時は島々宿から島々谷を遡り、徳本峠を越えて上高地に入る道が一般的であった。上高地を舞台に小説「河童」を書いた芥川龍之介、上高地に滞在して油絵を描いた高村光太郎と結婚前の智恵子もこの道を通っている。近年、この道は、豪雨や地震による災害で通行禁止になっていたが、令和 6 年夏には開通予定とのニュースが流れてきた。一度は徳本峠を越えて上高地に入り、古き時代に想いを馳せたいと考えている。

写真 -2　明神池と明神岳

◆上高地の成り立ち

現在の上高地が形成されるはるか昔の梓川（古梓川）は、岐阜県の平湯付近から高原川、神通川となって富山湾に流れていた。今から約 1 万 2,000 年前に焼岳火山群の白谷山（焼岳と安房峠の間）が大噴火を起こして古梓川を堰き止め、巨大な湖（古上高地湖）が誕生した。古上高地湖は長さ 12km、幅 2km、深さ 400m と大きく、湖水は徳沢の少し先まであったと考えられている。古梓川は現在の河床から約 300m 下を流れる両岸が切り立ったＶ字谷であったが、古上高地湖によって 6,000 年以上の長い時間をかけて埋め立てられ、現在の平坦な上高地の原型が作られた。古上高地湖は約 6,000 年前の断層活動による地震によって決壊し、長野県側に新たな流路を得た梓川は、湖にたまっていた土砂を含む洪水となって松本盆地まで流れ下り、松本市梓～安曇野市豊科一帯に広がる段丘面を形成した。その後、約 4,200 年前に焼岳が噴火し、この時の溶岩流が梓川を堰き止めた。約 500 年間は湖であったが、約 3,700 年前に決壊し、釜トンネル脇の釜ヶ淵の険しい渓谷を作った。

大正池は大正 4 年（1915 年）の焼岳の噴火による泥流で梓川が堰き止められて出現した。近年は上流からの土砂が堆積し、できた時点より面積は縮小し、水深も浅くなっている。池の中の立ち枯れの木もほとんど見られなくなった。土砂を取り除く浚渫作業が行われているが、将来的には大正池は消滅するかもしれない。

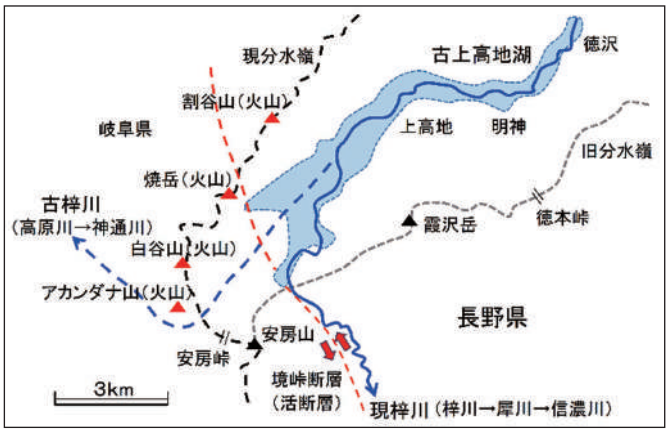


図 -1　約 1 万 2 千年前の上高地周辺の地形

写真 -3　大正池と焼岳（3 月）

◆上高地周辺の地質

釜トンネルを抜けて上高地に入ると梓川を挟んで焼岳が見えてくる。焼岳火山群は、新生代第四紀の約 12 万年前の割谷山などの活動から始まり、約 3 万年前には白谷山、アカンダナ山、焼岳の火山活動が始まった。主峰の焼岳は現在も噴気活動が活発で、気象庁が火山性地震の常時観測を行っている。焼岳は粘り気のあるマグマからできたデイサイト（雲仙普賢岳の平成新山と同じ種類の岩石）からなる溶岩ドームとこれが崩壊して発生した火砕流堆積物で形成されているが、記録に残っている噴火はすべて水蒸気噴火であり、溶岩は流れ出ていない。

河童橋から見上げると、奥穂高岳、前穂高岳、明神岳が連なっている。これらの山々は溶結凝灰岩からなる。溶結凝灰岩は、カルデラの形成を伴うような大規模噴火による火砕流堆積物が固まった岩石である。穂高連峰は大規模噴火を起こした火山として生まれたのである。ただし、この大規模噴火は新生代第四紀の約 176 万年前のことであり、その後の侵食によってカルデラ地形は残っていない。カルデラの大きさを阿蘇カルデラ（約 9 万年前）と比較すると、南北方向はほぼ同じ長さであるが、東西方向は約半分と推定されている。一方、ジャンダルムは、閃緑斑岩からなる。閃緑斑岩は、溶結凝灰岩の中を割って入ってきたマグマが冷えて固まった岩石である。溶結凝灰岩と閃緑斑岩は同じマグマから生まれたものである。閃緑斑岩は、ジャンダルムから吊尾根の奥穂高岳側にかけてと北穂高岳滝谷の中腹に見られる。

河童橋から下った田代橋の近くにウェストン碑がある。レリーフが埋め込められている岩盤は深成岩の花崗閃緑岩（滝谷花崗閃緑岩と言う）である。花崗閃緑岩は、上高地から西穂高岳独標手前の稜線、さらに飛騨側の蒲田川右俣谷の左岸側に分布し、滝谷の下部岩壁を作っている。この花崗閃緑岩は、新生代第四紀の約 140 万年前に固まった世界で最も新しい花崗岩類とされた（現在は約 80 万年前に固まった黒部川花崗岩が世界で最も新しいとされている）。カルデラ噴火によって地表に流れ出たのが溶結凝灰岩で、この噴火を起こしたマグマが地下の深い場所で冷え固まり、その後地表に現われた岩石が花崗閃緑岩（深成岩）である。仮にマグマが地下 3,000m で固まったとして、140 万年で 2,000m の稜線まで隆起（上昇）したと仮定すると、1 年に約 3.5mm、100 年で 35cm 隆起し続けたことになり、地殻変動としては急激な変動になる。

明神に近づくと道が白色に変わり、中生代白亜紀後期～新生代古第三紀始めの約 6,400 年前の花崗岩の分布域となる。徳本峠に向かう登山道の分岐である白沢には、マサ土（花崗岩が風化して砂状になったもの）が流れ出している。花崗岩は、常念岳から屏風岩、明神岳の中腹から霞沢岳まで帯状に続いている。なお、常念岳の頂上の三角形は、花崗岩の熱によって砂岩の鉱物組成が変化してできたホルンフェルス（変成岩）からなる。非常に硬い岩石であり、常念岳の頂上部分は侵食されずに残って尖った三角形となっている。

上高地から横尾までの林道沿いで最も古い岩石は、中生代ジュラ紀の約 1 億 5,000 万年前の堆積岩（砂岩・泥岩・チャート）で、明神から徳沢側に少し行ったところには泥岩が見られる。蝶ケ岳から徳本峠周辺の山々はこれら堆積岩からできている。

写真 -4　ウェストン碑（周りは花崗閃緑岩）

◆上高地の春

雪に閉ざされていた上高地は、4 月中旬に通行止めが解除され、4 月 27 日に上高地開山祭が行われ、多くの人が訪れるようになる。ゴールデンウイークは木々の芽吹きにはまだ早いが、残雪に覆われた穂高連峰は美しく、河童橋から見上げると登山意欲が湧いてくる。3,000m の頂上稜線から 1,500m の上高地まで下山してくると、真っ赤に日焼けした顔に大汗が流れ、疲労感と充実感が交錯する。

5 月も中旬になると、新緑は深まり、林道沿いにニリンソウが咲き乱れて、春の訪れを示してくれる。

上高地は、平成 8 年からマイカーの全面規制が行われているが、それ以前は混雑する時期のみを対象に規制が行われていた。30 年以上前のことであるが、ゴールデンウイーク明けにマイカーで上高地まで入ったことがある。昔の釜トンネルは狭く、一部は素掘りだったので、通行するのが怖かったことだけが記憶に残っている。

写真 -5　春の穂高連峰

写真 -6　ニリンソウの群落

◆上高地の夏

木々の緑と青い梓川の向こうに穂高連峰が望まれる。上高地は、大勢の観光客と登山者で溢れかえる。明神池までは観光客も多く、嘉門次小屋の名物、イワナの塩焼きを食べるのも順番待ちである。標高 1,500m の上高地でも真夏は暑く、下山してビールで喉を潤すのが自分への褒美である。ビールと言えば、今では北穂高岳小屋や槍ヶ岳山荘で生ビールを飲むことができる。これもヘリコプターによる荷揚げの恩恵であるが、歩荷の時代には、標高が上がるにつれて缶ビールの値段も上がっていたような記憶がある。

写真 -7　夏の穂高連峰

写真 -8　嘉門次小屋のイワナの塩焼き

◆上高地の秋

9 月末～ 10 月初めは、標高の高いところでは紅葉が見頃となり、上高地は大勢の観光客と登山者で埋め尽くされる。特に涸沢カールの紅葉は有名で、山小屋は畳一枚に 3 名とか、テント場は満杯とか、朝のトイレは大行列とか、行く気が失せる情報が数多く入ってきた。10 月も半ばを過ぎると、冠雪した穂高連峰の白と梓川沿いのカラマツの黄色のコントラストも見応えがある。

上高地に行くと必ず立ち寄る場所がある。小梨平キャンプ場入口にある上高地ビジターセンターの裏手を流れる清水川に架かる清水橋である。清水川は六百山の麓から湧き出た全長 300m 程度の小さな河川で、清水橋から川を覗き込むと、澄んだ水と水中に揺れる緑色の植物が一年を通してみることができる。この水中の緑の植物は、藻類ではなく、キンポウゲ科の沈水植物のバイカモである。

写真 -9　秋の穂高連峰

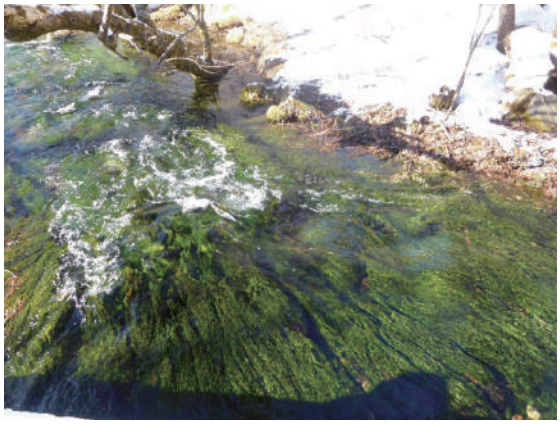


写真 -10　清水川のバイカモ

◆上高地の冬

11 月中旬～ 4 月中旬まで、上高地は冬季閉山となる。以前は沢渡の少し先から除雪が行われていない車道を歩き、路面が所々凍っている狭くて暗い旧釜トンネルを通り、トンネル出口の雪崩に注意しながら上高地まで入っていた。河童橋まで行くのに一苦労であった。平成 9 年に中の湯と平湯を結ぶ安房トンネル（4,370m）が開通し、年間を通して松本～高山間のバスが運行されるようになった。平成 17 年に新しい釜トンネル（1,380m）、平成 28 年に上高地トンネル（558m）が開通し、上高地まで比較的楽に短時間（釜トンネル入口から河童橋まで約 2 時間）で行くことができるようになった。令和 6 年の正月はトンネルの照明によってヘッドランプを使うこともなかった。ただし、釜トンネルは急勾配で、標高差は 100m にも及び、冬山装備で歩くと汗をかくこともある。

トンネルを抜けると先ず焼岳が目の前に迫ってくる。大正池、田代池を通り、梓川沿いを河童橋まで散策するコースは、季節を問わず気持ちいいものである。最近はツアー

客も見けるが、人気のない河童橋は違った趣がある。

梓川河畔では、ケショウヤナギが生育している。ケショウヤナギは、日本では北海道十勝・日高地方と上高地周辺にしか分布しておらず、氷河期の遺産と言われている。5月の新緑の時期もきれいだが、枝先が赤く色づく秋～冬にかけて、雪化粧した山々とのコントラストも絵になる風景である。

写真 -11　冬の河童橋と穂高連峰

写真 -12　冬のケショウヤナギ

◆上高地での出会い

上高地から徳沢まで林道を歩くと、一年中、どこかでニホンサルに会う。上高地のサルは人をあまり気にしていないようで、林道を悠々と横断するサル、木道の真ん中で寝ているサルなど、我が物顔で歩き回っている。冬には木の皮や笹を食べているサルを見かけるが、数年前にサルがイワナを捕食していることが論文に発表され、2022年には世界で初めて撮影に成功したとのニュースが流れた。

写真 -13　梓川河畔でくつろぐニホンザル

写真 -14　雪の中のニホンザル

令和5年は日本全国でクマ出没のニュースがあふれたが、上高地も例外ではなく、多くのツキノワグマの目撃情報が発信されている。クマによる事故は、令和5年に岳沢湿原の木道で観光客が襲われて負傷した事故があった。令和2年の小梨平のキャンプ場で数張りのテントが襲われて一人が負傷した事故以来である。私は幸いなことに上高地周辺でクマに遭遇したことはないが、最近「昨日この先でクマを目撃」との注意喚起の看板が増えた気がする。

上高地の有名人と言えば、アマチュア画家の渡辺勝夫氏（通称渡辺画伯）である。4月～10月の間、小梨平のキャンプ場でテント生活をしながら、60年以上も上高地から見える穂高連峰の油絵を描き続けている人である。手紙は「松本市上高地　渡部画伯」の宛名で届くらしい。絵には河童橋は描かれておらず、「人工物は入れない」とのこだわりがある。御年84歳、非常に元気で、とても気さくな方である。実は渡辺画伯のテントもクマに襲われたことがあり、令和2年のクマの事故以来、近くのバンガローに移り住んでいるとのことで、一安心。「来年は分からない」が口癖であるが、上高地で再会したい方である。

写真 -15　気さくな渡辺画伯

令和6年の正月明けにも上高地を訪れたが、雪が非常に少なく、ツボ足で楽に歩くことができた。明神池まで足を延ばしたが、人のいない明神池も新鮮であった。

上高地は何度も行った場所であるが、季節によってその表情が変わり、また行きたい場所である。今後も自然を満喫できる場所として変わらずにあって欲しい。

写真 -16　穂高連峰（渡辺画伯作）

参考文献

原山智（1990）：地質調査報告 5 万分の 1 地質図幅「上高地地域の地質」，地質調査所
原山智・山本明（2003）：超火山槍穂高，（株）山と渓谷社
竹下光士・原山智（2023）：槍・穂高・上高地地学ノート，（株）山と渓谷社

5. 令和5年度支部活動報告・令和6年度支部活動計画

令和５年度福岡支部通常総会報告

◇日時：令和５年５月 20 日（土）14 時　開会
◇場所：天神パインクレスト１階会議室
　　：福岡市中央区天神 2-3-10
会員数：54 名　総会出席：14 名　委任状：21 名
合計：35 名
各議案は審議され承認された。
総会後に記念報告会として、国境の山岳信仰「脊振山系の峯入り廻峰道を歩く」を浦支部長から報告があった。

福岡大分県境を歩く（耶馬渓から英彦山）延期

公益事業として、数回に分けて実施予定であったが、浦支部長の入院・逝去により延期とした。

夏山フェスタin福岡２０２３（第６回）開催

◇日時：2023 年６月 24 日（土）・25 日（日）
◇場所：電気ビル共創館４Ｆみらいホール
来場者数：24 日約 1,600 人（2022 年 1,700 人）、
　　25 日約 2,900 人（2022 年 2,500 人）
合計：約 4,500 人
講演：女性初 8000 m峰全 14 座登頂を目指す福岡県出身の渡邊直子氏、登山 YouTuber かほ氏などのセミナーを実施

九州５支部集会（東九州支部主催５支部懇談会）

◇日時：８月５日（土）　午後 14 時、法華院温泉山荘集合。
支部集会と懇談会（宿泊）
講演：加藤英彦（前東九州支部部長）、
　　松田宏也（日本山岳会本部理事・千葉支部長）
◇８月６日（日）午前、『山の安全を祈る集い』

忘年登山＆忘年懇親会開催

◇日時：2023 年 12 月 16 日（土）
◇場所：鐘撞山、忘年会場：元気くらぶ
参加者 14 名：松原、倉智、中村正、副島、渡部、山井、酒匂、中村寛、加藤、水野、飯田、柴田、原、尾登

令和６年度の支部活動計画案

令和６年度福岡支部通常総会予定
◇日時：令和６年５月 26 日（日）14 時　開会
◇場所：福岡中央市民センター 視聴覚室（予定）

福岡大分県境を歩く（耶馬渓から英彦山）を再度計画するか検討中
公益事業として、数回に分けて実施するか検討中

夏山フェスタ in 福岡２０２４（第７回）開催
◇日時：2024 年６月 22 日（土）・23 日（日）
◇場所：電気ビル共創館４Ｆみらいホール

その他、支部山行を計画

【お知らせ】Ｅメールアドレスをお知らせください。
お知らせなどの即時性、利便性を考え電子メールでの情報発信を行います。まだＥメールアドレスをお知らせいただいていない方、変更された方は、下記福岡支部までメールにてお知らせください。

（社）日本山岳会 福岡支部 事務局
JAC 福岡支部　e-mail: fko@jac.or.jp
日本山岳会事務局：渡部 秀樹
TEL：092-715-1557　　FAX：092-715-0826

《編集後記》

2023 年（令和５年）は偉大な先輩方の訃報が相次いだ。１月 29 日所属は東海支部だったが糟屋郡篠栗町に居を構えておられた石原國利さん、９月２日には第９代支部長でおられた中馬董人さん、11 月３日には現役支部長でおられた浦一美さんの急逝は支部役員はじめ支部会員には大変なショックであった。

浦一美さんと 1973 年ランタンヒマール、1998 年チベット・ナムナニ峰に共に隊長として参加された太田五雄氏、ナムナニ峰の隊員であった中山健氏から、支部事務局長の渡部秀樹氏からそれぞれ追悼文が寄せられた。

中馬董人さんは電電九州山岳会から九州で初のヒマラヤ遠征でヒムルンヒマールに参加、2012 年から 2016 年まで支部長を担っていただいた。中馬さんが所属されていた九州大学山岳会会長の米澤弘夫氏から追悼文を寄せていただいた。

石原國利さんは井上靖の小説「氷壁」のナイロンザイル切断事故の当事者である。長年にわたり石原さんを支持されシンポジウムなどを開催され、機会あるごと映像を残された山の図書館の重藤秀世氏と尾登憲治氏から追悼文が寄せられた。と言うことで「偉大なる先輩方の追悼特集号」となった。

本来なら昨年計画していた古道を歩くシリーズの「福岡大分県境を歩く（耶馬渓から英彦山）」記録を予定していたが、リーダーであった浦一美氏が体調不良で治療に専念するため昨年は中止となり残念ながら掲載できなかった。

毎年北アルプス山行をされている原義宣氏から「立山･雨飾山山行報告」を寄稿いただき、松原稔氏からは「脊振山塊の藪山･藪漕ぎ」と題して各山塊の魅力が垣間見えます。柴田佳久氏からは昭和 37 年に初めて訪れ、魅せられ四季折々に訪れた「上高地」の歴史から地質・動物・植物など多岐にわたる地域研究を寄稿いただいた。

年に一度の支部報の発行ではあるが、今年も多くのご投稿をいただき発行にこぎ着けることができた。ご投稿いただいた皆様には感謝申し上げます。来年も会員諸氏の積極的なご投稿をお願いします。（K.K）

■発行者：支部長代行 渡部秀樹　■編集者：倉智清司　■発行日：2024 年（令和６年）３月 15 日
■発行所：公益社団法人 日本山岳会福岡支部　〒 811-1302 福岡市南区井尻 5-6-14-201　渡部秀樹 方　TEL/FAX 092-592-8170